

四方山ばなし 断捨離は続く

コロナ禍から抜けつつある今、私が目覚めたことについてとりとめもなく。



執筆者： 山下 彰子

昨年の年末、ふと思いついて部屋の大掃除を始めた。年末に大掃除をするのは当たり前、と言われそうだが、特に来客もない我が家では例年、水回りや窓をいつもよりちょっと丁寧に掃除する程度。仕事が忙しいことにかまけて普段の掃除も手抜きとなると、部屋は雑然として年々物は増える一方で、控えめに言っても、これは汚部屋かも……。いよいよまずいぞ、と感じ、急に「断捨離」をしたい気持ちが膨らんできた。ところでこの「断捨離」は、やましたひでこさんの登録商標。ここでは“商標的使用”ではないということで、お許しを。

最初は「まあ、いらぬ服を捨てよう」くらいの感覚だったのが、やり始めるとどんどん他の場所も気になってしまい、大晦日になっても終わらず、結局正月休みをすべて片付けに費やすこととなった。元来、物持ちはいい方で、幼稚園の頃に先生からもらったスヌーピーの筆立てを今も職場で使用している。そう簡単に物が捨てられない性質。狭い我が家ながら、色々な不用品が出てきた。

例えばフードプロセッサの、なぜか替え刃だけがキッチンの奥に。フードプロセッサの本体は見当たらず、そもそもそんなものを買ったかどうかもあやふやだ。メルカリに出品したところ、数千円で売れた。ゴミに出せば単に資源の無駄になってしまったところ、メーカーでも既に欠品であろう替え刃が誰かの役に立っていると思うとうれしい。ちょっとしたお小遣いになったのも、もちろんうれしい。

それから大学時代の卒業生名簿。当時（約30年前）は個人情報保護という考え方などまったくなかったので、卒業生の住所、電話番号、就職先まで書いてある。新聞や雑誌と一緒に資源ごみに出すわけにもいかず、一枚一枚シュレッダーに。

一番多かったのは、健康器具。腹筋を鍛えるローラーや、足をバタバタやって太ももを鍛える道具、ストレッチに使うゴムやヨガのマット……。値段もそれほど高くなく、通販で気軽に買えるため色々と手を出したが、いつもすぐに飽きてしまう。そして「いつかまたやる気になるかも」と捨てられずに溜めこむ羽目になる。やっと「いつかは来ない」と自覚し、まとめて処分した。

そんな年末の断捨離から半年が過ぎた現在、再び部屋が散らかることもなく「余計なものをもたない」という意識がだいぶ自分自身に定着したように思える。なぜずっと「片付けねば」と思いながらも、面倒で、重い腰を上げられなかったのに、今回は断捨離をすることが

できたのだろう。コロナ禍で多くの人が暮らしを見直したように、家にいる時間が増えたことにより、生活空間を改めて気分一新したくなった、というのは大いにあるだろう。それから、以前と比べて思い出に執着しなくなったことがあるかもしれない。何しろ、記憶力がだんだんと怪しくなっており、昔のことがあんまり思い出せない。昔の日記などを読み返しても、自分が書いたとは思えないほど、当時とあまりにも価値観が変わってしまっていて、なんというリアリティが感じられない。後生大事にとっておいた思い出の品々も、遠い過去というよりは、まるで前世から来た物みたいだ。要するに年をとったということなのだろう。

とは言うものの、もちろん捨てられない物もあった。そのひとつが母の手作りのワンピースで、わたしが10代のころ好きな柄の布を買ってきては同じパターンでいくつも縫ってもらった。こういった物は、親が年を取ればとるほど捨てられなくなりそうだと思うながらも、クローゼットの奥に戻しておいた。母に断捨離の話をしたら、倉庫にわたしの教科書やノート、その他学生時代のものがそのままになっているので、次回の帰省では片付けるように言われた。すっかり身ぎれいになったつもりでいたが、30年以上もその存在すら忘れていた不用品が、まだ実家の方に残っていたとは。引き続き断捨離しなくてはならないが、次はいったいどんなものが出てくるか、若干楽しみでもある。